

知って役立つ発達心理学

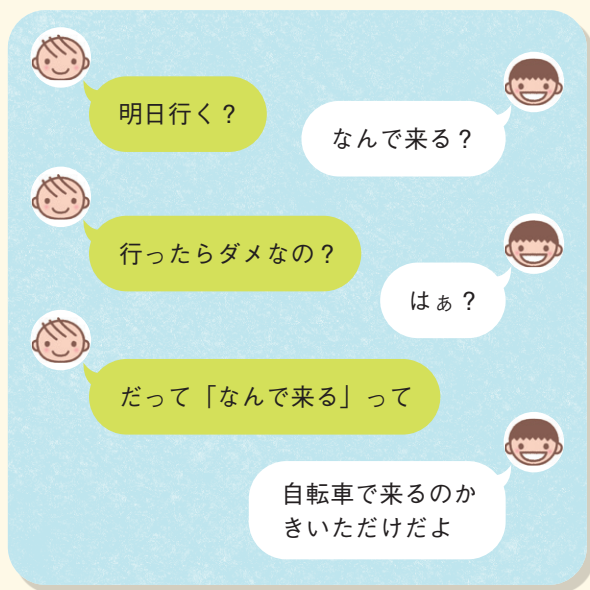
渡辺弥生

Yayoi Watanabe

(法政大学教授)

第5回 ミス・コミュニケーション——気持ちのボキャブラリーを豊かに

クラスの中で飛び交う言葉に注意を向けると、「うざい」「やばい」といった表現が多くなっていますか。SNSでのやり取りも、「明日行く?」「なんで来る?」「行ったらダメなの?」「はあ?」「だって『なんで来る』って」「自転車で来るのかきいただけだよ」……といったミス・コミュニケーションが頻繁に起きています。こうした短いインパクトのある言葉は、使い手に、互いの感情の強さが響き合う感覚を与え、どこか共感し合ったような錯覚をもたらします。しかしその一方で、互いの状況を深く思いやり、共感するためのコミュニケーションが阻害されてしまいます。



感情リテラシーが育っていない?

教材の登場人物の気持ちを子どもが理解できていないという問題が指摘されています。これまで、それは読解力の問題として考えられていました。しかし、実は、感情の読み書き能力ともいえる「感情のリテラシー」が育っていないのではと危惧されています。感情のリテラシーは、自分だけでなく他者の感情を適切に理解し、表現する能力のことです。自分の怒りや悲しみの気持ちをコントロールする力も含みます。教材から考

え、議論するためには、まず登場人物の「気持ちを感じる」が必要です。

例えば、登場人物が無視されて〈「悲しい」「怒っている」〉と感じていることを理解するには、「悲しい」「怒っている」という気持ちのボキャブラリーが欠かせません。言葉をもつことによって、初めて、他者の気持ちを理解することができるわけです。そして、それについて自分は〈「かわいそう」「いたたまれない」〉気持ちになっていると気づくためには、自分の気持ちを「かわいそう」「いたたまれない」という言葉に置き換える力が求められます。

感情のボキャブラリーを増やそう

つまり、何か体験をしたときに、自分の心の中で生じる心の振動が「気持ち」であると気づき、その気持ちを理解するためには、自分の「心的辞書」※から気持ちを同定できる言葉を取り出す力が要るのです。こうした力は自然には伸びません。子どもたちが登場人物の気持ちを答えられずにいるとき、「無視されて悔しかったのかな」「腹立たしかったんだね」などと、子どもの気持ちを代弁してやる働きかけが必要です。

いくら自分で考えさせても、子どもの心の辞書に、いろいろな気持ちのボキャブラリーがアップデートされていなければ、乏しいデータベースからは引っ張り出せないのです。「悔しい」「腹立たしい」という言葉で自分のモヤモヤした状態を表現できることに気づければ、やがては自発的に「悔しかったんじゃないか」と思います」と表現できるようになります。

こうした働きかけをし、道徳的感情ともよばれる「慈悲」「感謝」「罪悪感」「恥」といった高次の気持ちの理解を育てるためには、まずは教える側の心的辞書のボキャブラリーのアップデートが必要といえます。

渡辺弥生 ●わたなべ やよい

発達心理学、教育学博士。法政大学文学部教授。著書に『感情の正体——発達心理学で気持ちをマネジメントする』（筑摩書房）、『子どもの「10歳の壁」とは何か? 乗り越えるための発達心理学』（光文社）など。監修に『まんがでわかる発達心理学』（講談社）など。光村図書小・中学校『道徳』教科書編集委員。